



としよかんまつり2015

10/24(土) 25(日)



きてね

家族みんなで楽しめる企画満載！ぜひこの機会に図書館にいらしてください。

当日は万治くん・やしまるも参加します。

恒例の古本市は11月14日(土)・15日(日)におこないます。

24(土)

時間

25(日)

9:30~ 展示 俳句 エンジョイ フォト SUWA 写真展 木鶏クラブ 「人間学を まなぶ」	10:00 ~ 12:00 体験 しよう 朗読 点字	10:00 ~ 12:00 こども 俳句 教室	10:30~12:00 癒しのハーブ アルパ コンサート 社中学生による 「大型絵本朗読」 マジックショー	9:30~ 展示 俳句 エンジョイ フォト SUWA 写真展 木鶏クラブ 「人間学を まなぶ」	10:30~11:30 おはなしの広場 北小1年生の劇 「おむすびころりん」 おはなしのへや 「おいもころころ」 「はらぺこあおむし」 ・星の会の朗読 「あしなが」 「ともだちのしるしだよ」 ・向陽高校生読みきかせ	10:00 ~ 12:00 体験 しよう 朗読 点字	11:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00	14:00~16:00 理科大出前講座 「LEDランタンを作ろう」 事前申込みが必要です。 材料費 400円
--	--	--	---	--	---	--	---	--

問い合わせ先 下諏訪町立図書館 0266-27-5555

下諏訪町の魅力

万治の石仏の謎



一 万治の石仏伝説

大きな自然石の上に、イースター島のモアイ像にも似た、何ともユニークな風貌の首をのせた万治の石仏。伝説では、春宮の大鳥居の石材にしようとして石工がノミを入れたところ、石から血が噴き出し、祟りをおそれた石工は作業をやめたという。その夜、この石工の夢枕にアマダ様があらわれ、鳥居の石材として良いものが桑原山（現在の諏訪市四賀桑原）にあるとのことお告げがあった。石工はその通り桑原山の御影石を使って立派な鳥居をつくりあげ、鳥居完成後、最初に切り出そうとした石にア

博物館係長 宮坂 清

ミダ様を刻んで供養した。万治の石仏はこうしてできたと言われ、語り継がれています。

二 春宮大鳥居の地下から礎石を発見

平成二十四年秋、この伝説をあらためて見つめなおす発見がありました。春宮の大鳥居が耐震補強工事のため解体されることになり、その解体工事中、地中から、鳥居を支えていた大きな二つの礎石が発見されたのです。



二つの礎石

礎石は巨大な石を割ったものであり、その大きさは、縦横の長さが約二m、高さ約一m、重量は数t程度と推定されています。上面にあたる割れ面の平坦面には、約七十五cmの丸い穴が掘られており、この穴に鳥居の柱がはめ込まれ、大鳥居を支えていたことがわかりました。そこで考えるべきは、春宮の大鳥居は、地上の鳥居部分だけでなく、鳥居を支えていた礎石を含めた巨大建造物であるということです。

三 万治の石仏伝説の再解釈

万治の石仏伝説では、春宮大鳥居の石材に使われるためにノミが入られたとありますが、鳥居の大きさからすると、石仏の胴体部分の石はかなり小さい。春宮大鳥居の柱は二段継ぎの構造になっていますが、一段の長さが約五・五mであり、石仏の胴体部分の長さは三m強です。したがって大鳥居の石材に使うにはちよつと無理がある。そこで、今回発見された礎石に注目してみると、大きさは石仏の三

分の二程度であり、石仏の胴体部分を割って四角形に形を整え、るとちよつと礎石の大きさに近づきます。石の質も、礎石は砥川の河原にふつうにみられる大きな安山岩なので、万治の石仏からそれほど離れていない場所から運ばれてきたものと推定されます。



こうした点からすると、万治の石仏と春宮大鳥居の礎石はよく似ており、鳥居の石材として使おうとしたというのには、じつは、鳥居を支える礎石として使おうとした、と考えた方が良いのではないかと。

むろん、多角的な研究が必要になるのですが、万治の石仏伝説は、春宮大鳥居を、礎石をふくめた巨大建造物として考えることによつて、より史実に近い、新たな解釈へと発展させることができるものと思われれます。

ほのぼの

まちかどで

「うわー風が気持ちいい！」
「本当！今日は曇っているから、ちよつどいいね。」
あれ、これは何？」

「四手網だね。じゃあ、この辺からはじめようか」

七月のはじめにボランティア仲間とともに諏訪湖のヒシ取りに参加した。陸と湖のふたてに分かれ、三十そうほどの舟に交代で乗った。今にも降つききそうな空模様の中、雨具の上に救命胴衣をまとい出発。

ふだん湖周に暮らしながら、めつたに舟など乗る機会がないので、エンジン音を響かせながら、風を切つて進んで行く舟は爽快だった。時々波しづきがかかると妙にワクワクしてきた。

遠くへ目を向けると、子どもが舟べりから身を乗り出し、一生懸命ヒシをたぐり寄せていた。絡んで引き上げられない時は、家族が手を貸し、子どもを見守っていた。

風音や刈りたる藻屑地に広げ

作業を終える頃には空も明るくなり、舟いっばいに積み上げられたヒシは、次々と岸へ上げられていった。湖を渡ってくる風が、さらさらと音をたて、何とも心地よいひとときであった。(篠遠良子)

※「刈りたる藻」は、季語

